



着物地は丹後ちりめん緞子地の
【本天然染料御花黒手描黒染訪問着】



去年の春、「ウィーンオペラ舞踏会 春の祭典」にご招待された。

久しぶりのブラックタイの華やかで格調が高いパーティーで、隣室ではカジノ・オーストリア・インターナショナルのデモンストレーションが行われていた。

20年ぶりのタキシードは寸詰まりで着れなかったので新調したのだが、この時、女性の着物姿を見てふっと日本の男性がブラックタイ様式というのはいかがなものかと。カジノの場で国際的に日本男子を引き立ててくれるのはブラックタイ様式なのだろうか？と疑問に思った。

日本オリジナルで日本的な物として、まずアロハシャツがあげられる。

アロハシャツは、ハワイに移民した日本人が、着古した着物を子供に着せ、それを見た地元の人々が1900年の初め、着物地を買ってシャツにし、1935年にジョージ・フジイ氏が「アロハシャツ」として広告したのが始まりである。私の記憶では、移民で口くな服もない夫のた

めに妻が晴れ着をシャツに仕立て送り出し、その際に誰とはなく「アロハ」と送り出しているのを聴いた現地の人達の間で、「アロハシャツ」という名前が定着したのだと思う。

「アロハシャツの始まりは妻が夫を思いやる心」……これが肝心。

そこで、国際的なパーティーで日本男子の存在を訴えるために、私は着物をタキシードに仕立て、カーマベルトと襟及びタイは帯を活用することを考えた。

早速、タキシードに合うと思う着物と帯を買って、晶頂の仕立て屋（日本橋のデパート）へ持ち込んだが数日後「出来ません」と返事をもらった。

仕方なく着物をリメイクした本を買って、作家先生方にパーティーの性格や今後の日本の宣伝にとタキシードの製作をお願いしたがこれも断られた。

そこで、友禪の製作販売している松岡京道氏（京都壬生堂会長）に事情を話し製作をお願いしたところ「やってみましょう」と快諾を得た。

徳島発 着物タキシード 『婆娑羅(ばさら)』

日本のドレスコードの創製カジノでお会いしましょう！

文：日本カジノ健康保養学会 クリニック釈羅 中西昭憲

この話を、我がメンバーに伝えると酔狂な3名が応じた。

せっかくのタキシードということで「婆娑羅(ばさら)」と名付けた。そしてさらに、着物を使った服の商標登録として「婆娑羅」を出願して受理された。

この婆娑羅は、太平記に出てくる佐々木道誉の「婆娑羅大名」が有名であるが、新しい文化を生み出そうとした南北朝時代のエポックでもあった。

またタキシードも1960年代にビークック革命の流れの中でカラフルなタキシードが着られた時があったので、あなたが着物のタキシードは道を外れてはいない。

着物の柄選びもさることながら一度も女性の袖を通した事のない着物をリメイクするのは、着物を作られた山岡古都先生には大変申し訳ないことと反省をしているが、現在着てくれない着物を箆筒のこやしにするよりは、女性を奮い立たせる素材として、男性が国際的なブラックタイのパーティーで着物を着用して、日本を売り出すのも酔狂であり、新たな日本のお土産として見出してくれると、逼塞しつつある日本

文化に活をいれることにも成りかねない。もっつけの幸いである。

タキシードを注文したが、ある人からは「着物に対する冒涇だ」、身内からは「芸能人がチンドン屋ね」と言われ、内心「チンドン屋かも知れない」とビクビクした。

また「このタキシードを着てカジノで最小単位のチップを1枚づつ賭けてると最高に目立ちますね」とからかわれたりもした。

しかし、出来具合に感嘆した。チンドン屋でも受け狙いの芸能人でも冒涇でも良いと思った。

今年の「春の祭典パーティー」に再び招待を受け、そこで初のお披露目となった。美女2名と高橋三千綱氏の援軍つきである。どうだ！まいったか！

婆娑羅万歳！



中西昭憲氏(右から2番面)と高橋三千綱氏(左)